

## まとめ (Summary)

著者	寶學 淳郎
雑誌名	体育史研究 = Japan Journal of the History of Physical Education and Sport
巻	28
ページ	65-65
発行年	2011-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43060">http://hdl.handle.net/2297/43060</a>

## まとめ (Summary)

シンポジウムでは、趣旨説明の後、福島様、山本先生にご発表をいただき、ディスカッションを行った。直前のお怪我のため成田先生にご登壇いただけなかったことは誠に残念であった。成田先生からはすで完成されていた発表原稿をいただいていたので、配布の上、寶學が若干の説明を行った。

ここでは、3つの発表及びディスカッションに関連して、コーディネーターとして感じたことを簡単に述べておきたい。

福島様の「大正期におけるサッカーの中学校への普及—大正期にサッカーを校技化した中学校の特徴—」と題するご発表は大変興味深いものであった。GeNii 学術コンテンツ・サービスを利用しても明らかなように、そもそもわが国におけるサッカー史に関する研究は少なく、大正期以後のものはなおさら少ない。福島様のご発表は大正期にサッカーを「校技」として導入した中学校に焦点を当てたものであった。そして、この導入がこの時期における中学校の数的増加、野球の加熱と問題、高等師範学校卒の教員の赴任、パブリック・スクール志向などと関連づけられた。発表の中心は大正期であったが、プロ化以前の日本サッカー史の流れを示唆させるものであった。福島様のご発表に関するディスカッションでは、先ず、中学校のグラウンドの広さに関するご質問（木下秀明先生）がコーディネーターとして興味深く感じられた。それは、渡辺融先生のお考え「市民スポーツの普及・発達のための重大な要件として、施設、用具、指導者、試合相手を含めた仲間づくり、広報活動があげられている。これらの要件はスポーツの普及を論ずる場合、現在のみならず百年前にも通用するであろう」（日本人はなぜ野球を選んだか、UP、第170号、1986年、22-26頁）が思い出されたからであった。また、1900年頃の日本におけるパブリック・スクール像を見直す必要性というご意見（阿部生雄先生）も興味深く感じられた。

ブラジル・サッカー史をご専門にされている山本先生の「ブラジルにおけるサッカーの伝播・受容—『定説』と再構築される歴史像—」と題するご発表もまた大変興味深いものであった。ブラジルにおけるサッカーの伝播・受容について、英米の研究者の視点とブラジルの研究者の視点が異なることや、近年のブラジルにおけるサッカー史研究の動向（実証的成果を踏まえた従来の定説の見直しなど）が主に語られた。ブラジルにおけるサッカーの初期のルール、他のスポーツ種目との競合、学校体育と地域クラブの関係、上層から下層への伝播のスピードなどが論議されたが、ディスカッションにおける山本先生のご発言も私たちに多くの新たな知見をもたらした。

成田先生には、学会大会後に改めて執筆を依頼し、「体育史研究」第28号に「サッカーの伝播と受容・展開を考える—ドイツの場合—」の全文を掲載した。主にドイツへの一般的なサッカーの伝播と受容・展開の様相、トゥルン・フェラインへのサッカーの伝播と受容・展開、ドイツサッカー連盟と関連諸団体間の共同と対立が非常にわかりやすく実証的に論じられており、学会大会で論議できなかったことが重ねて悔やまれる。

ディスカッションにおいて当初予定していた種目史研究の可能性にまで言及できなかったことは、ひとえにコーディネーターの力不足による。今回のシンポジウムでも明らかなように、近代スポーツを「伝える側」と「受容する側」の諸事情は多様である。私たちは今後とも数多くの実証的な個別研究を積み上げ、論議していく必要があると思われる。

（シンポジウム・コーディネーター：寶學淳郎）